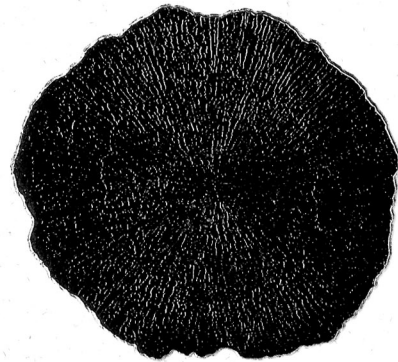


INTERNATIONAL

COSMOS

PRIZE

2001



コ ス モ ス 国 際 賞

One with Nature: ランドスケープ、言葉、共感、想像

アン・ウィストン・スパーン

2001年度コスモス国際賞を受賞し大変光栄に存じます。「自然と人間との共生」を推進するというコスモス国際賞の目的は、今日最も緊急を要する問題の一つだからです。

人間の存在は、人間とランドスケープ——都市、建物、庭、道路、川、野原、森を持続可能なものにしていくことにかかっています。大気、大地、水、生命、文化が相互にかかわりあっていることを意識し、そういった要素を意識しつつ、生命を持続させる新しい方法で調整をすることによって、機能的で持続可能であり、意義があつて巧みなランドスケープを形作ることにかかっているのです。

ランドスケープ・アーキテクトでありプランナーであり、同時に教師、学者、作家、写真家として私は、今申しあげた目標の達成に専心してまいりました。以前は、この目的の達成を妨げるもの、それは、知識の不足であると考え、その不足を埋めようと最初の本を書きました。それが「The Granite Garden: Urban Nature and Human Design (邦訳名:アーバン・エコシステム)」です。1984年にこの本が出版された後、私は、科学者や博物学者に限らず、なんと多くの人々が、都市を含めた人間の居住地が自然界の一部であるという紛れもない事実を抵抗するか、あるいは無視していることを知って驚きました。自然とはどういうものかという概念は、強い意識と信念から来ることに気づいたのです。こういった考え方は、非常に個人個人のもので、多種多様であり、ですから、そういった考え方を变えるのは、単に説得力のある主張を展開するかどうかの問題ではなく、知性と心の両方に届かなければならない問題なのです。写真やランドスケープの設計は、人間が自然における人間の位置を感じ熟考するための強力な手段です。

私は今では、自然と人間との共生を推進できるかどうかは、単に知識にとどまらないそれ以上のものにかかっていると確信するに至っています。知識と同じくらい重要なのは共感すること(つまり、人が、他の存在、もの、あるいは場所が自分と同じ意識をもっていると思うこと)と、想像力です。私の最近の著作である「The Language of Landscape」と、私が現在執筆中である「Telling Landscape」は、人間が、自然と文化双方の産物としてランドスケープを読み解く手助けになり、

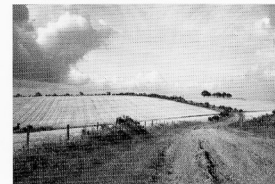
自然を回復し、文化を尊重する新しいランドスケープを思い描く刺激になればというのが執筆の目的です。

偉大な俳人芭蕉は、芸術家にとって大事なことは、一年の四季を通じて自然とともにあることだと言っています。これは芸術家だけではなく、誰にとっても、特に都市の住人にとって大事なことです。たとえば、ボストン市の海岸線沿いに、日が暮れてから東を見ると、アーチ状になった黄昏時の日の光、地球の影、すべての生命を包む自然の永久の営みを思い起こさせるそういった景色が見られます。



地球の影が昇り、
青い潮が薔薇色に染まる
10月の黄昏

また、先史時代南イングランドを横切る商業ルートであったリッジウェイの初夏は、こういった感じでした。



古代の路を雲が流れる
空の路は大地の道を映す

私は、芭蕉と日本の詩である、連歌、俳諧については初歩的な知識しかありません。しかし、この日本の伝統芸術は、自然の営みと調和した人間の居住区を作るための重要な洞察を与えてくれるように、私には思えます。ハルオ・シラネ氏は、彼の著書「Traces of Dreams: Landscape, Cultural Memory, and the Poetry of Basho (邦訳名:芭蕉の風景 文化の記憶)」で、「俳諧」を、二人以上の詩人によって通常詠まれる多くの短い詩、つまり俳句の連なりであると説明し、俳諧では、「詠み手はそれぞれ、先立つ句が作りだした詩的世界を受け取り、同時に新しい独自の世界を開く」と説明しています。この変更可能な、集団による創造的プロセスは、ラン

ドスケープを形作るプロセスと似ています。ランドスケープはすべて、庭であろうと、農場、町であろうと、複数の作り手があり、彼等は互いや自然と対話しています。ランドスケープは、ランドスケープの作り手が、地方の文化伝統およびその地方の自然の状態の両方にどう応答したかを具現化しています。たとえば、米国西部のハイ・プレーンズは乾燥しており、広々としています。木々はほとんどなく、水も人間の集落もまれです。農家はそれぞれで、厳しい自然から家を守るためや燃料に使うために周りに木を植えています。



木々が農場主の家を抱いている
広々とした平原にぼつり、
冬風の音

あらゆるランドスケープでは、対話がつづいています。「白紙状態」のように何も対話がないことはありません。その対話に加わらねばなりません。ランドスケープを作るあらゆる作業は、芭蕉が仲間たちと詠んだ俳諧の一句一句に似ていて、今現在行われている対話を尊重し、広げ、次の行動を刺激する表現であることが必要です。俳諧を構成する短い俳句の一句一句のように、時と場所の個別の特性を強め、一見異質な物をつないでいこうと努力するべきなのです。

私たちは誰もが、都市で、郊外で、田園地方で、ランドスケープを読み解き、読み取ったものを理解し、今度は新しい知恵を生み話し、ランドスケープの表現力を育てる方法を学ぶことができます。まるで私たちの生活がそれにかかっているかのようにです。というのも、確かにそうなのです。

The Granite Garden: Urban Nature and Human Design (みかげ石模様の庭：都市の自然と人間のデザイン)

—邦訳名：アーバン・エコシステム—

自然は、どこにでもあり、都市は自然の一部です。都市の自然は、庭などを通じて育てる必要があります。駆逐すべきものでも抑制すべきものでもありません。庭は、大都市圏も含め、都市を心に描き直すための力強く有益なメタファーです。このメタファーが私に最初の著作である「The Granite Garden: Urban Nature and Human Design」を書かせたので

す。うまくいった庭というのは、人間の文化と自然界の調和の表現です。そういった庭では、有益な管理を実行する取り組み、人間の力の及ばない自然現象が存在することの認識、この両方が存在します。庭は決して100%予測可能な世界ではありません。人間は予測しえない状況が発生することを踏まえつつ庭を造ります。

「アーバン・エコシステム」では、多くの学問分野から得られた情報を述べ、合成し、応用して、どのように都市が自然の一部であるかを示し、またどのように、自然の営みと摩擦を起こすのではなくむしろ呼応するように、都市を計画し設計することができるかを証明しています。大気、土、水、動植物、エコシステム、それぞれに一章を設け、家・庭から都市・地域まで異なるスケールでの成功例を紹介しました。

コロラド州デンバーを例にとりますと、この都市の暴風雨に備えての都市排水システム、水害防止システムは、度重なる壊滅的な洪水が発生した後に構築されたものであり、各都市での洪水対策をどのように行うかのモデル・システムです。

自然のシステムは、土や植物、川に嵐の際の雨水を留めます。川の水は氾濫原に溢れ、そこに何も建築物がなければ、隣接地帯は水害から守られます。デンバーは発展するにつれ、土地が、どんどん増える建物と舗装された道で覆われてしまい、雨水をしみこませる能力が低下し、その結果、暴風雨水が分水界からサウスプラット川へ流れ込む速度がどんどん速くなっていきました。6月、ロッキー山脈が雪解けを迎え、川の水量が高くなったこの時期に雨が降ると、時に壊滅的な洪水を引き起こすことがあります。1960年代、デンバー中の橋を破壊した洪水があり、その結果、何か対策を講じねばと誰もが確信するに至ったのです。

デンバーは、サウスプラット川沿いに歩行者・自転車専用の緑道を張り巡らせ、また数多くの支流と排水路を建設しました。これらは、公共のスペースであると同時にその地域の治水システムの一部です。放水路は、近くの道と住宅の水害を防ぐために、両側に堤防を設けてある小川のようなのです。広場は、デンバーの市街地にあるスカイライン広場のように、周りの屋根や舗装道路から雨水を集める暴風雨水の滞留池の役目も果たします。このシステムは暴風雨の際の雨水の流出を遅らせます。それまでは、雨が降れば数時間以内にサウスプラット川に流れ込んでいたのが、数日以上かかるように

なりました。それまでに洪水の水はおさまってしまいます。この都市の治水システムとは、いくつかの公園や広場であり、それらは都市にとって財産です。日本にも例があります。神戸市は都賀川の水量の増減を抑え、市を洪水から守るために公園を建設しました。公園の全敷地は100年前にできた氾濫原内にあります。テラス部分は年間平均の洪水の高さを示しています。

都市計画および都市設計において自然界のさまざまなプロセスに注意することは、災害や問題を回避するために必要なだけではありません。コミュニティの発展と都市の回復のための好機を生み出します。

都市の再建と都市における自然の回復

ウェスト・フィラデルフィア・ランドスケープ・プロジェクト

1984年以降、私は、「アーバン・エコシステム」で提唱した方策を研究しつづけてきました。環境の質、貧困、人種といった問題に対応するために、スラム街で実験的なデモンストレーション・プロジェクトについて研究し、また指導してきました。14年間、ウェスト・フィラデルフィアは、生命を維持しつづける方法で都市のランドスケープを変化させることに関してのアイデアを試す研究室でした。

私の仕事は、多様な分野から成りますが、根元にあるのは、ランドスケープ・アーキテクチャーの知識と方法であり、そこから得た識見です。ランドスケープ・アーキテクトは、庭から地域までさまざまなスケールで人間に役立つよう、ランドスケープを設計し計画します。この範囲の広さは、この学問分野には基礎的なことであり、私が提案するのは、都会の小さな公園のデザインから都市の広い分水界のプランまでいろいろです。私の仕事がめざすのは、望み通りの目標を達成するために、どのように自然と文化のプロセスが相互に作用しながらランドスケープを形作るか、どのようにそれらのプロセスに介入したりプロセスを作ったりすべきかを把握することです。庭、近隣地区、都市、地域などのスケールでランドスケープを設計する方法および手段は異なっても、ランドスケープを形作るプロセス、つまり自然の、社会の、経済の、政治のプロセスは同じです。ランドスケープがプロセスの相互作用の産物であることを理解することは、一見無関係なようで実は密接に関連した行動や現象の関係を理解する方法なのです。

重大な問題のなかには、通常、狭く定義された単一目的専用の解決策、乏しいリソースを争うというような解決策ですが、そういった解決策を用いて個別に対応される問題が



コロラド州デンバーのコンフルエンス公園
Confluence Park, Denver, Colorado USA.

いくつかあります。たとえば、住宅やオフィスの水害、川や港の汚染、低所得者層の住む都市部の過密地区のスラム化等です。

米国の都市の多くでは、かつて建物が密集していた地域が広大な空き地になっています。これらは共通して問題であるとされますが、しかしそれらは、スラム地区の改造を進めつつ、都市の自然環境を回復する機会でもあるのです。ほとんど認識されていないのですが、こういった空き地の多くが、埋め立てられた氾濫原の谷底に集中しているのです。私が氾濫原と空き地のこういった関係を最初に発見したのは1985年のボストンです。私は低所得者の居住区を訪ね、丘の頂上部分と中腹にはほとんど空き地がなく、谷底にあたる地域はたいてい空き地であることに気づきました。かつてこれらの谷を流れて川が流れていたことが古い地図を調べてわかりました。1876年から1984年の地図を比較すると、この近辺は居住区になったり見捨てられたりがつづいてきたことがわかったのです。丘の頂上と上の方の坂の部分に最初家が建ち、氾濫原と川は埋め立てられ、最後に低価格住宅が建ったことです。これらの建物のなかには1910年には早くも見捨てられたものがありました。1964年には、この谷底エリアの広い地域がすでに空き地になっていました。地

下には水が流れ、建物の地下部分は水浸しになり、基礎がいたみ、建物が放棄される原因となりました。旧市街地区への投資を減少させ、新しい郊外のコミュニティの開発を促した政治的・経済的なプロセスや、人口の移動と放火などの社会経済的現象によって、ますますその傾向は進みました。1970年代には、多くの家主が火災保険金をねらって壊れかけた建物に火をつけ、1985年には、空き地の数はさらに増加していました。地元の人たちや市当局は、原因は社会経済的な要因だけだと信じていました。氾濫原の埋め立て地における排水不良・地盤沈下という自然のプロセスが関係していることに気がつかなかったのです。それで、悲しいことに、彼等は低い土地にある空き地にまた建物を建てたのです。

同様の状況が他の多くの米国の都市に見られます。ウェスト・フィラデルフィアのミルクリーク地区は、1987年から私がかかわっている地域ですが、ここには、広い空き地と建物が、古い水流の道筋に沿って存在します。19世紀後半、水流にかわって下水道が建設され、氾濫原は埋め立てられ、建物がその上に建てられました。1930年代以降、周期的に、下水道の側に建っている建物が陥没しはじめたのです。

ボストンやフィラデルフィアのように水流を埋め立て、暴風



マサチューセッツ州ボストン、ダドリー通り付近の空き地の航空写真
Aerial Photograph showing vacant land in Dudley Street neighborhood, Boston, Massachusetts USA.

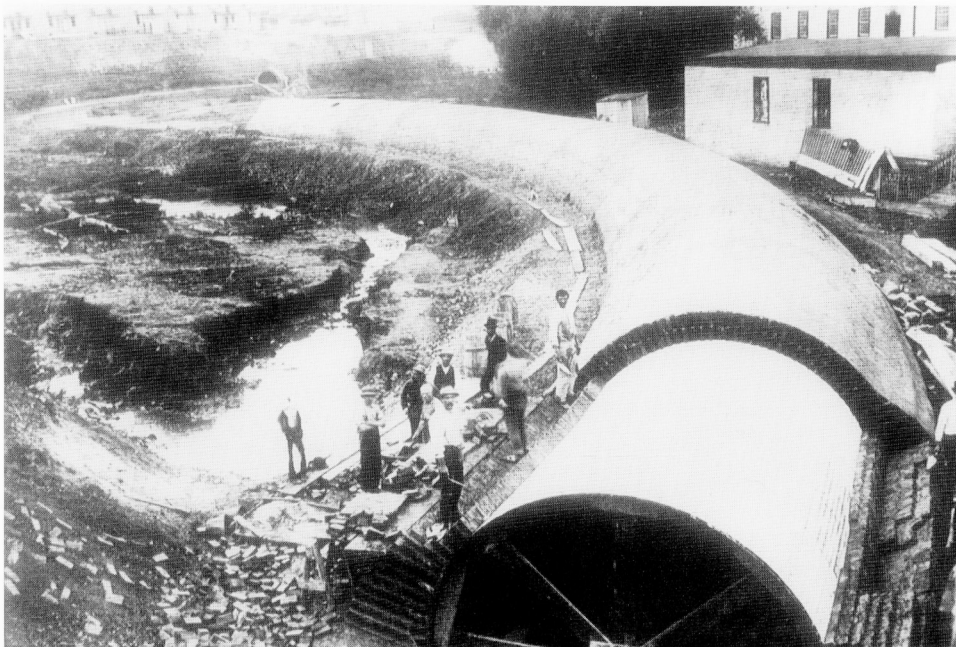
雨水と下水の両方を運ぶ巨大な水路にかえることによって、洪水や地盤沈下以外の問題が発生しました。合流式下水道のオーバー・フローです。豪雨の後、フィラデルフィアのスケールキル川のような都会の川に沿って車を走らせると、川の色が茶色く水面には、てかりがあり、下水道処理施設の汚水のようにになっているのがわかります。豪雨があると、非常に多くの雨水が道から流れだし、下水道に流れ込みます。住宅やオフィスからの汚水と混ざってしまい、下水量が多すぎて、下水処理施設が処理できないのです。そして、未処理の下水が、市民の飲料水の源である川に直接溢れだします。これは、フィラデルフィアをはじめとして、下水と雨水を同じシステムで処理するのが通常だった時代に建設された多くの都市では大きな問題になっています。

1970年代、多くの都市では、下水処理と雨水処理のシステムを分離し、その結果雨水は直接川に流れ込むようになり、下水処理施設が処理できないような状況になることはなくなりました。しかし、科学者は、このように変更しても、期待するほどは川の水質が改善されないことを発見しました。というのも、都市の雨水はそれ自体汚染されているからなのです。現在では、都市は汚水だけでなく、豪雨の流出水も処理すべきであるということが認識されています。合流式シ

ステムをとることはある意味では有利ですが、問題は、豪雨の後、処理の必要な水の量が急増した場合どう処理すべきかです。すでに実行している都市もありますが、巨大な下水処理施設を新しく建設するほうがいいのでしょうか？

自然のプロセスを理解すると、合流式下水システムのオーバーフローを防ぐ方法が別にあることがわかります。水が下水処理施設にたどり着く時間を引き延ばすために地上に雨水を引き留める方法です。都市にある氾濫原の埋め立て地をもう一度考えてみてください。そういった埋め立て地をランドスケープの重要な構成上の部分、つまり新しい建物を建てない特別区域とする必要があります。その埋め立て地を緑道や、公園、あるいはデンバーにあるような広場として再構築したらどうなるでしょう。暴風雨水を留め濾過するためのランドスケープのインフラは、水害を防ぎ、下流で合流式下水システムのオーバーフローが発生するのを防ぎ、その地域の水質を改善し、そしてスラム化した地区の生活環境も改善されます。

1985年、ボストンで私は初めてこういった提案をしました。その後、フィラデルフィアでは長年、小川を埋め立てた土地は考慮すべき力であり同時に開発すべきリソースであると、都市計画委員会とフィラデルフィアの水道局への説得をつづ



建設中のミルクリークの下水設備。1880年代
Mill Creek sewer in West Philadelphia under construction, 1880s.

けてきました。プランナーとエンジニアは、すぐ目の前にある正しいことに気がつかなかったのです。私は、根底にある問題は、一種の非識字の問題のようなものだと考えるようになりました。彼等は、ランドスケープが語るストーリーが読めないで、それに応えられないのだと。人々にこの根本的な能力を身につけてもらおうと、私は2冊目の「The Language of Landscape」を執筆しました。

共感と想像：The Language of Landscape

ランドスケープの言葉を読むことができると、それぞれの地域のランドスケープに組み込まれた環境、社会、経済、政治のストーリーを知ることができ、新しいストーリーをどのように語るべきか考える力がつきます。「The Language of Landscape」は、「アメリカユクノキと忘れられた小川」というタイトルのプロローグではじめました。そこから本文を引用します。私がこの本を書いた理由をお伝えできると思います。

アメリカユクノキと忘れられた小川

古い図書館の側に植えられた一本のアメリカユクノキは、すぐに葉を出し、花を咲かせ、実をつけ、種を蒔いた。しっかりと根を張り、煉瓦が敷き詰められた広場の下から空気と水を吸い込んだ。学生たちはユクノキの下で毎年春になると腰を下ろし、自分たちの名前が呼ばれるのを聞き、木陰を喜び、ユクノキの木陰を図書館へ歩いていき、6月には麝香(じゃこう)の香りのする花を楽しみ、10月には赤煉瓦の上に落ちてくる黄色い落ち葉を蹴って歩いた。

ユクノキは年々育っていった。赤い煉瓦が黒ずみ、図書館の建物は老朽化した。人間たちが図書館の修理にやってきて、たくさんの道具や、タイルや袋をユクノキの周りに積み上げ、煉瓦の下の土を塞いだ。2年後、図書館は再び開館し、有鉛ガラスは輝き、黒くなった石は明るくなった。「なんて優雅」と人々は言った。その秋、ユクノキは9月に早くも葉を枯らした。

5月、ユクノキはいつもより早い時期にあふれんばかりに花を咲かせた。何千という匂やかな白い花が長い房になって咲いていた。花びらが煉瓦を覆い、芝生の上を風に乗って舞った。「なんてきれいなんでしょう」と人々は言った。けれど、悲しいことに、数年の間の芽痕は小枝の先に固まってつ

いていた。花がたくさん咲くのは枯れかけている徴候であり、種も広場の土の上に落ちることができなかった。人々はユクノキを賞賛し歩いた。彼等はそのユクノキが語る言語がわからなかったのだ。かつては一本のユクノキが立っていた。でももうこの場所にユクノキが育つことはない。でもなぜかを知る人はほとんどいなかった。

ある日、道が崩れ落ちた。両側の歩道は黒い深い割れ目に崩れ落ちた。人々は見下ろし、地下に茶色い激流を目にして驚いた。「何年も前にこんな穴にトラックが落ちた」と誰かが言った。「昔、一晩で家々が1ブロックまとめて穴のなかに落ちたことがある。」とまた誰かが言った。どこの話かはつきりはわからなかった。6ヵ月後、穴は埋め直され、穴のあいた道路は修理され、両脇の歩道は作り直された。何年も過ぎて、新しい住民たちが越してきたが、水がしみだし、道は水浸しになり、壁にはひびが入った。

かつては川の流れていた。人間がそれに名前をつけてその名前を呼びはじめるずっと前。つまり、ダムがその力を発揮しはじめる何千年も前から、流れ、曲がりくねり、流れ落ち、溜まり、その水の流れを人間は下水道に閉じこめ、その上には家を建てた。今や、雨水や下水で膨れ上がった埋められた小川は、パイプを破裂させ、土に浸み、地下を浸水させ、建物の土台を崩壊させている。暴風雨の時には、茶色い水が水の引き入れ口から、マンホールから道にあふれだし、処理施設では対応しきれないほどの水量となり、街の飲料水の源である川へとなだれ込む。

板張りの家や花や野菜でいっぱいのコミュニティの公園の近くにある草や低木が生い茂った空き地は、誰も知らない蛇行した線に沿ってある。この人の目に触れない線上に建つ学校では、体育館が雨が降るたびに浸水する。一年に一度、教師は生徒をバスに乗せ、「自然」を実際に見て研究するために街の郊外へ連れていく。

昔空き地だった場所には、新しい家々、赤煉瓦、黄色い外壁、細長い形をした緑の芝生、開かれた門扉、近くの古いめっちゃめっちゃになった家や荒廃した土地と対照的に建っている：「初めて不動産を購入する人は、借りるよりも安くこの家を手に入れます。」という看板が立っている。これらの家々は、寄付金の小銭と団体の基金を元手に教会が建てたのだ。土地は市から譲り受けた。「なんてきれい」と人々は言う。誰もなぜこの土地が空いていたのか、なぜ水溜まりがあ

るのか、なぜその土地の名前が「ミルクリーク(水車場の小川)」なのか不思議にも思わない。

希望のしるし、警告、それらはすべてその辺にあるのだが、見えない、聞こえない、見つけられないのだ。ほとんどの人間はそういったしるしをもはや読み取ることができない。氾濫原に住んでいるのかどうか、都市の一区域の再建を行っているのか地区の崩壊の種を蒔いているのか、彼等が飲料水を保護しているのか汚染しているのか、一本の木を大事にしているのか殺してしまうのかわからない。ほとんどの人々はその言語を忘れてしまって、空き地の野の花や若木が生命の再生力について語る言葉を読み取れない。多くの人々は、町の公園の乱雑な秩序の美しさを理解できない。彼等にはランドスケープの言葉が聞こえないし、見えないのだ。

建築家の設計図には、根はなく、生長もなく、ただ緑の標識と建物が図の上にあるだけだ。まるで大地が平坦で空白であるかのように、木は物体であって命ではないかのように。プランナーの地図には、埋め立てられた川も流れもなく、ただ道と、所有地の境を示す線と、将来の利用についての提案があり、まるで過去は現在には存在せず、都市はただ人間の建造物であって、生きた変化していくランドスケープではないようだ。子供たちの教科書には理科から歴史の教科書に至るまで、近所の光景は載っておらず、直接体験から知り得る知識については提案も要求もしていない。ただ、方程式と遠く離れた場所と人について述べているだけで、まるで数字や言語が地域的な意味をもたないようであり、またそれらの現在には過去はなく未来もなく、生徒は容器であって登場人物の一人ではないようだ。

枯れたユクノキは、私が最初に見たユクノキだった。その匂やかな花は、大学院に入った最初の年、私を驚かせた。同じ年に私の部屋の近くに穴ができ川が現れた。ユクノキは枯れたが、いまだに私が日々たどっている道に存在する。忘れられた小川は今や私の仕事の心臓部である。あの当時、私は枯れかけた木々や埋め立てられた川のことなど何も知らなかった。今では、私は、傾斜する谷、沈む道が語るもの、芽痕が語るものを読み取る方法を学んだ。ランドスケープは複雑な言葉に溢れ、道が、土地が、大気が、水が、語ったり書いたりしている。人間はストーリーを語る動物であり、ランドスケープのメタファーで考えることができる。たとえば、根を下ろすことはコミットメントを意味し、根を引き抜くのは外

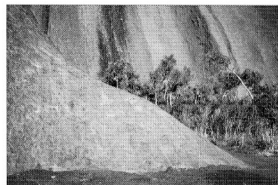
傷を意味する。木がその場所に根を張って生きているように、言葉は、ランドスケープに根を張っている。

ランドスケープのもつ意味は、隠喩的だけでなく、形而上学的であるが、真実である。ランドスケープのメッセージは実際のなのだ。理解は、滅亡ではなく存続を意味するだろう。ランドスケープの言葉を失う、あるいは聞いたり読んだりできないと、身体と精神を脅かすことになる。というのも、ランドスケープの言葉の実際的な側面と想像的な側面は常に共存してきたからだ。生命をしかるべく機能させているこの言葉を学び直すことは急務だ。

このユクノキと小川の話は単なるたとえ話ではありません。本当にあった話なのです。ウェスト・フィラデルフィアの小川を埋め立てた土地に家を建てた人々、同じ場所に建て替えた人々は、ランドスケープの言語が読めず、小川の存在を読み取れなかったのです。フィラデルフィアのキャンパスでユクノキが過剰に早すぎる花をつけた、それを賞賛した人たちは、芽痕が語っているものに気がつかなかったのです。彼等は花が強く訴えているものを読み取れず、土壌や、広場や、建築会社とユクノキの関連を想像できなかったのです。私は学校の校長(彼は建築家でしたが)を説得して、建設会社のトレーラーや器具を置く別の場所を見つけてもらおうと努力しましたが、うまくいきませんでした。ユクノキが結果として枯れてしまうであろうことを納得していないのか、気にしていないのか、彼は拒絶しました。

私はランドスケープの言葉は私たちの母国語であると確信しています。ランドスケープは人間の元々の住処なのです。人間は、空の下で、地上で、水のそばで動植物と接しながら進化してきたのです。あらゆる文化において、誰もが心身にこの遺産を保持しています。人間は触れて、見て、聞いて、匂いをかいで、味わって、ランドスケープで暮らし、ランドスケープを形作ってきました。それは、人間がランドスケープがしたことすべてを説明する言葉を手に入れる以前のことで、ランドスケープは最初の人間の教科書であり、他の記号やシンボルが発明されるまで、人間はそれを読んできました。雲、風、太陽は、天気を知る手がかりであり、さざ波や渦巻きは、岩や水中の生命のしるしであり、洞穴や岩礁は避難場所になり、木々は食物や水への案内であり、捕食者の存在を警告するのは鳥の鳴き声です。ウルル(エアーズ

ロック)は、オーストラリアの中央部にありますが、多くの方法で読み取られます。ランドマーク、避難所、乾燥地帯で水や食料を確保する場所などです。ウルルは何千年も前からアボリジニの畏敬の対象でした。



稀にしか降らない雨を集める
砂漠という海に浮かぶ島
赤い岩、神聖な場所

ランドスケープの言葉は「話し」、書き、読み、想像されます。ランドスケープを「話すこと」と読むことは、生活の副産物であり、生存のための戦略の一つです。つまり、避難所を創り、保護を与え、食料を育てることです。ランドスケープを読み、形作ることは、学ぶと同時に教えることです。世界を知り、考えを表現し、他人に影響を及ぼすことなのです。言語としてのランドスケープは、考えを具体化し、想像を可能にします。そうして、人間は子孫たちと経験を共有します。祖先が彼等の価値観と信念をランドスケープに刻みつけたように。祖先はそうして、文学の豊かな源泉を、つまり自然と文化の歴史、計画的なランドスケープ、詩、力、そして祈りを遺産として残しました。ランドスケープは实际的であり、詩的であり、修辞であり、論争でもあります。ランドスケープは生命活動の舞台であり、洗練された建築物であり、意味を運ぶ運び手でもあります。それが言葉です。

その土地特有のランドスケープの統一性は、作り手と場所の対話から生まれ、年をへて微調整されていきます。ランドスケープは、降雪と屋根の勾配、季節の太陽の角度と屋根のひさし、風の方向と生け垣の位置、栽培状況と畑の寸法、家族構成と定住パターン、それぞれの間の一致について語っています。

ランドスケープの意味は、複雑で、層に分かれていて、曖昧で、決して簡単でも直線的でもありません。川は流れ、与え、創造し、破壊します。道と境界を同時に、時には門構えさえです。火事は焼き尽くし、形を変えさせ、新しくします。円形は階層的ですが、中心だけではまだ非階層的ですが、円周に沿ったすべてのポイントは中心から等距離です。二つ以上の要素を一緒にしてください。そうすると、潜在的な意

味とつながりができます。神聖なランドスケープにおいて、動き、道、表玄関は、しばしば重なり合い、それらが出会う境界では精神的な変化を起こさせます。ストックホルムの「森の斎場」の「思い出の丘」へと上っていく広い道は、最初は急ですが、石の階段は高さがなく、接地部分には石の粉を厚く敷いており、12段ごとに踊り場状の場所を作っており、上りやすくなっています。それから、坂が次第になだらかになり、丘の頂上になる開かれた入り口を通して木々の間を抜けていき、低い塀の中で休憩します。上り坂の最初の方では、階段は中腹にあり、そのスロープは上り手をしっかり捉えてくれます。最後に、木々と塀のフレームが取り囲みます。形と素材は、道を歩き慰めを得る、訪れた者にそういった経験をさせてくれます。そこにあるすべてが、設計者という語り手が意図した意味に合わせて、動きのプロセスも、そして深い悲しみのプロセスもいくぶん変化させてくれるのです。

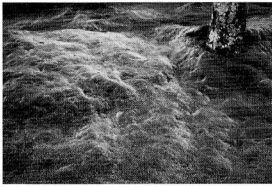


登り、包まれる
「言い表せない悲しみに
形を与えられる」

ランドスケープの言葉を回復し新しくするという事は、新しいメタファーを見つけ想像し、新しいストーリーを語るための、新しいランドスケープを創造することです。ジョン・バーガーは、異なる文化の間に横たわる深い淵を越えて、共通部分と固有の部分解釈する経験の言語について説明しています。生態学者のアルド・レオポルドは、人間もその一部である大きな動植物の生息環境を脅かすような先見の明の無さに陥らないよう、人間が「山の身になって考える」ことが必要だと書いています。人類学者のグレゴリー・ベイトソンは、人間は、「どういった生物がいるかという観点で」言葉を話すことを学ばなければならないと言っています。それは、別個の物としてではなく動的な関係としてこの世界を読み取り、複雑な生物系を管理する方法を実践するためだと言っています。ランドスケープが話す言葉はそのような言葉なのです。こういった点で、世界は組織され、生き物は行動します。人間は、山の身になって考え、人間の命と他の生物の

命を同様に維持するランドスケープを形成することができ、アイデンティティーを育み、同時に多様性を賞賛することができるのです。

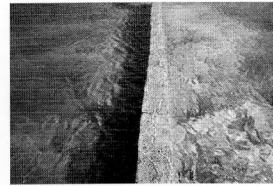
今や、新しい話を語り、以前から存在する二者択一の苦しい選択の問題をもう一度考え直すべき時なのです。どう世界で生き、同時にどう世界を保つべきか、どう伝統を維持し同時に革新を促すべきか、どう自由を推進し同時に秩序を育むべきか、どう部分部分を認め同時に全体を把握すべきか。逆説とは、一見矛盾しているものの融合であり、今ほどこれが重要な時はありません。



茂った流れるような苔、緑根が伸び、苔の波を作る引き、満ち、静寂が訪れる

このパラドックスなどは、京都の西芳寺の庭に存在します

が、通常のランドスケープにも溢れています。たとえば、オーストラリアのシドニー港の水溜まりにも。これらは、今はどうで、どうなっていく可能性があるのかを知る手がかりです。



波と港の壁
明るい浅瀬と暗い深みを形作る
二つの側面、一つの表面

ランドスケープの言葉は、我々に、ランドスケープ全体を意識し形作るよう促します。ランドスケープを読み、流暢に話すことは、今行われている対話に気づき、他の話し手のストーリーを評価し、つかの間の対話と永続的な対話を区別し、会話に加わるための一つの方法です。ランドスケープの言葉は、私たちに、同じ状態でとどまっているものは何もないこと、破滅的な変化と積み重なった変化が現在を形作っていることを、私たちに思い出させてくれます。そうして、私たち



オーストラリア、ピングーの家。建築家グレン・マーカットの設計
House at Bingie, Australia, designed by architect Glenn Murcutt. Photo: G. Murcutt.

は他の方法では経験できないであろう過去を認識し、可能性を予測し、未来に思いをめぐらし、選択し、創造することができるのです。私たちは、目の前にはないもの、今日の草原に未来の森林を「見」、そして根が枯渇し窒息したために枯れかけているユクノキを「見る」ことができるのです。あるいは、乾いた川底のそばの木に、建物の土台のひび割れに、都市の舗装道路の陥没箇所地下水を「見る」ことができるのです。あるいは、埋め立てられた下水道にとってかわられた水流、空き地、汚染された川の間はどういった関連があるか、その水を浄化しつつコミュニティを再建することを想像したりできます。加えて、私たちは詩を心に描くことができるのです。

たとえば、オーストラリアの建築家のグレン・マーカットが設計した家を見てみましょう。グレン・マーカットは、太陽光や、植物の育ち方、水の流れ、風のプロセスを調べると同じくらい念入りにクライアントの生活パターンを調べます。この家は、オーストラリアの海岸沿いのビンジーにあります。この場所とここに住む人々の毎日の、そして季節ごとの

リズムを表現しています。屋根の輪郭は、羽を広げて飛んでいるカモメのシルエットをまねています。屋根の樋は、内側に傾斜している屋根の端ではなく、中央にあります。両端の円柱状のものが縦樋です。屋内の天井の形と、廊下の形は、水流が流れる道筋を表しています。雨は屋根の上に音をたてて降り、樋のなかに流れ込み、円柱状の縦樋を流れ落ちます。ホールの両端にはガラスの扉があるのでそこから見えます。そして、地下のタンクに溜まっていきます。この家の貯水槽です。水は、空の水源から地下の貯水槽まで繋がっています。必要な対話は詩的になり、毎日が非常に美しいものになります。優雅な節約は、マーカットの作品の特徴ですが、彼の環境美学を表現しています。

ランドスケープの言葉におけるマーカットの技能は、彼のクライアントを、彼等の命を維持するがたいに軽視されているプロセスと慎重に対話させます。光や空気が入ってくるように、あるいは強くしたり遮断したりするために、人々は、窓や壁を調整します。その過程は、風を捉えたり避けたりするためにボートのセイルを調整するようなものです。このプ



オーストラリア、ビンジーの家の室内
Interior, the house at Bingie, Australia, designed by architect Glenn Murcutt. Photo: G. Murcutt.

ロセスから人は学ぶのです。こういった家に住んでいる人たちには、光の変化、風の流れ、雨降り、貯水槽が雨水で満たされる、そういったことが見えるようになり、聞こえるようになり、触れることができるようになります。住人に自然のプロセスとこのような対話をさせる住環境——建物、道、下水道、公園などですが——を想像してみてください。

このような場所に住むと、人はランドスケープを読み取り、語る方法を身につけ、一見無関係の現象の関係を理解し、適切な応答を表現する方法を学ぶことができます。そのような住処は、共感を喚起し、人間の命と、他の生物や私たち皆が住む場所との連続性について考えるようになります。共感、つまり他のものが自分と同じ意識をもっていることが想像できること、特に他の人間や他の生物を思いやりをもって理解することができることは、最も重要な人間の能力の一つに違いありません。ランドスケープにおける能弁は、生き残るためだけでなく、共感的想像にとっても役に立つのです。

オーストラリアのビンジーにあるこのマーカットの家の設計とウェスト・フィラデルフィアに私が提案したものの両方を知っていたとしても、最初からこの二つが類似物であると気づく人はほとんどいないでしょう。でもこの二つは、片方が一家族のための家であり、他方が何千という家族の居住区のプランだとしても、類似物なのです。ビンジーの設計と、ウェスト・フィラデルフィアのプランは、両方の設計者の考え方、仕事の仕方が同じなのです。

1987年から、私の生徒たちと私は、ミルクリーク地区の住人と共同作業をはじめました。私たちは教え、そして学びました。コミュニティ・ガーデンのような小さなプロジェクトをデザインしましたが、それは建設され、時をへても維持されています。それから私たちは、より大きな都会のランドスケープを変貌させるプランを練りました。共同作業はインターネットを利用して進められました。このデジタル・データベース、活動、提案はすべて、ウェスト・フィラデルフィア・ランドスケープ・プロジェクトのサイトで見ることができます。ペンシルバニア大学の私のクラスの生徒たち、現在ではマサチューセッツ工科大学(MIT)の生徒たちは、ミルクリーク地域の空き地に、湿地や、水の庭、環境学習地域の設計をしました。彼等は都会の分水界を分析し、暴風雨水留置施設でもあるランドスケープ・プロジェクトで、どのように暴風雨水が集

められるか証明してきました。それから、都市の環境カリキュラムを立案・実施するためにサルツバーガー・ミドル・スクールの教師と生徒たちと共同作業をしてきました。これは、たくさんの空き地がそばにあるミルクリークの氾濫原の埋め立て地にあるこの学校を変貌させてきたプログラムです。

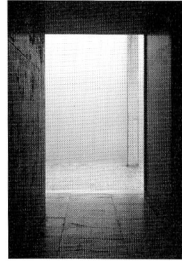
ウェスト・フィラデルフィア・ランドスケープ・プロジェクトは、ランドスケープ・リテラシーをコミュニティの開発の基礎として位置づけました。サルツバーガーのミルクリーク・プログラムに参加した子供たちはそれぞれランドスケープのストーリーを知り、ミルクリークのランドスケープを読み取ることができます。かつて大地の上のどこに水の流れがあったか、どの川沿いが先史時代の居住区であったか、綿や毛糸を編むために水車をどこで動かしていたか、どこが埋め立てられ、家が建てられたか、どの下水道の上の土地がもう一度空き地になったか。プログラムに参加した生徒たちはミルクリークの未来がどんなものかビジョンを描きます。どのように近隣地区が建て直され、水が元通りになり、どのように暴風雨水が屋根や、通りや歩道に流れ落ち、そして、水が下水道、下水処理施設や川に流れ込むのを遅らせるための池に流れ込んでいくのか考えます。

目標は、コミュニティの再建の中心に学校をおくことでした。子供たちが市民としての技術を学ぶようにです。場所について知る方法、その場所の未来を思い描き築く方法、それを大事にする方法を学ぶようにです。池や、蝶の飛ぶ庭や、堆肥の貯蔵庫のある野外教室が近くのコミュニティ・ガーデンに、学校のための生きた研究室として建てられました。サマー・プログラムでは、子供たちが教室を設計し、建て、それをメンテナンスするのを手伝いました。また、子供たちは、ウェブサイトを構築する方法を学び、提案や設計や業績をインターネットで発表します。このプログラムのハイテクな部分は、ペンシルバニア州知事、ビル・クリントン大統領にも認められています。大統領は2年前サルツバーガーを訪問しました。最終的に、1999年、フィラデルフィアの水道局は、サルツバーガー・ミドル・スクールの近くの空き地にデモンストレーション・プロジェクトを計画、設計、建設することを決定しました。合流式下水システムのオーバーフローを減少させるための暴風雨水留置施設と、このスクールのための環境学習エリアからなる施設です。このプロジェクトは、暴風雨水エンジニア、ランドスケープ・アーキテクト、ミドル・スクールの教師・生

徒、コミュニティの住人たちによって考えられた共同ビジョンです。

シェーマス・ヒーニーは、詩人の役割を、他の人には隠れて見えないものの存在を共感を通じて感じ、予言する古い師の役割にたとえています。たとえば、地下の水流を感知し、地面をたたいて泉を出す水脈占い師のようなものだ。ヒーニーは、この力を「そこに在るけれども隠れている、だけど真実であるものに触れる才能であり、潜在資源とそれを表に出し開放してほしいと考えるコミュニティの間を取りもつ才能」と言っています。詩のように、写真と設計はランドスケープに何が隠れて存在するのかを占う強力な手段です。「言葉はそれ自体ドアである」とヒーニーは言っています。写真や設計もそうです。写真家は、景色をフレームに納め、ある特徴について対話し、他は排除します。このフレーミングを通じて、人は、他人の心が入ってこれるようなドアを創造しているのです。共感的設計を通じて、つまり建築、ランドスケープ・アーキテクチャー、都市の設計とプランニングといったものを通じて、人は、伝統的なものと新しいもの、人間以外のものと人間、自然と文化を融合させる潜在能力

を用いて、いまだ不完全ではあっても一つの世界を思い描くことができます。これは、安藤忠夫氏の六甲の教会が示唆していることです。



燃え立つような、黄昏が

そこにある、隠れているが本当のものを見せる
永遠の入り口

設計者はストーリー・テラーです。設計は、新しいストーリーを想像し、話し、古いストーリーを復活させる方法であり、複数の選択肢からランドスケープのビジョンを選択するプロセスであり、未来の可能性を語るものです。設計が生み出したもの、つまり庭、家、道路、水のシステム、近隣地区、都市、これらには意味があり、その社会の価値観を表現するための生活環境です。私たちは、建設や植物を植えるプロセスを通じて、これらの意味を伝えたり、使ったり、無視したりします。最初は夢であったものに私たちは実際に住んでいるのです。



ウェスト・フィラデルフィアの住民とコミュニティガーデンの建設。1988年
AWS' student and research assistant John Berg, with community residents in West Philadelphia, constructing a community garden. 1988

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会

〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2番136号

TEL.06-6915-4500 FAX.06-6915-4524

The Commemorative Foundation for the International Garden and Greenery Exposition, Osaka, Japan, 1990

2-136 Ryokuchi-koen, Tsurumi-ku, Osaka 538-0036, Japan

TEL.81-6-6915-4500 FAX.81-6-6915-4524

<http://www.expo-cosmos.or.jp/>